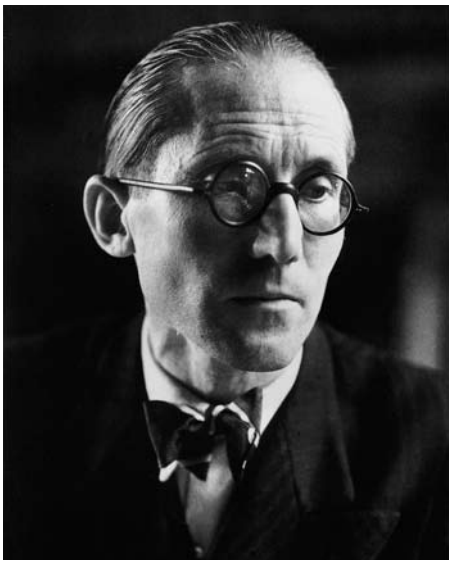
Le Corbusier
une encyclopédie

ル・コルビュジエ事典

ジャック・リュカン　監修
加藤　邦男　監訳



中央公論美術出版

おもな項目（全 145 項目）

■アルジェ：地中海からの呼びかけ

■ドイツ：影響、交流、そして絶交

■『ラルシテクチュール・ドジュルデュイ』誌

■建造者のアトリエ

■バルセロナ：ル・コルビュジエと GATEPAC

■小屋：カップ・マルタンのとても小さな家

■手帖

■ツェントロソユーズ

■チャンディーガル：それはなおも建築巡礼の地たりうるのか？

■ CIAM：整理棚の詩情

■色彩：建築の色彩化をめざして

■装飾（1925）：白色の濃さが問題なのだ

■室内装備：住まう術へのル・コルビュジエの貢献

■公共空間：近代都市のなかの新しい空間

■『レスプリ・ヌヴォー』誌：建築と宣伝

■人間形成期：ラ・ショー=ド=フォン工芸学校

■工業：標準とエリート：シトロアン症候群

■ジュネーヴ：結びつきと計画

■ジャンヌレ，ピエール

■イムーブル = ヴィラ：型の様々な起源

■室内整備：マルセイユのユニテ・ダビタシヨン、 1946 − 1952

■ルシュール型住宅：ルシュール法へのル・コルビュジエの回答

■マルセイユ：都市計画、1943-1951

■円熟：近代的なものとアルカイックなもの、あるいは晩年の作品

■モデュロール：ある寸法体系

■芸術運動 : 印象主義、表現主義、未来派

■ムンダネウム

■ミュロンダン式建造

■国際連盟本部 : 国際設計競技、1926-1931

■逆説：ル・コルビュジエの修辞、あるいは独学者の逆説

■パリ：首都諸計画案、1925-1961

■レスプリ・ヌヴォー館、1925

■オザンファン，アメデ

■絵画：1930 年以後

■ペレ，オーギュスト：機械主義時代の二人の英雄、あるいはバトンタッチ

■ペリアン，シャルロット

■ピロティ

■ピュリズム：デッサンと絵画：探求とひとつの言語の進化、1918-1925

■輝く都市

■ロンシャンの礼拝堂：過去の教訓

■リュ・ド・セーヴル 35 番地：舞台裏

■ヴィラ・サヴォワ

■彫刻

■諸芸術の統合：二重の逆説

■国土：新しい都市プラン、南米のエスキス、アルジェのオビュ計画

■ラ・トゥーレット修道院：あるプロジェクトのアルケオロジー

■ UAM：現代芸術家同盟

■ユニテ・ダビタシヨン：マルセイユ=ミシュレの最初の実現作品、1945-1952

■都市計画：最初の考え：『都市の建設』の未刊の草稿

■ソヴィエト連邦：モスクワでのル・コルビュジエ

■アメリカ合衆国：臆病者たちの国でのル・コルビュジエ

■ヴォワザン計画

■ 1907 年の旅 : イタリアへの旅

■ 1911 年の旅 : 東方への旅

内容見本

ル・コルビュジエが一冊所有していた「四つの交通路にて」の表紙（FLC）

S

Sur
Syndicalisme
Synthèse

出来事などと考えることはできないであろう。戦争とはもっとも重大な危機を最後に証拠立てるものにほかならないのだ。すなわち《私は繰り返す。終結するのはひとつの百年戦争なのだ。この戦争は、最初の蒸気機関車とともに始まった。この百年のあいだに、すべてのものが、ゆっくりと執拗にあらゆる領域にわたって破壊されたのだ。つまりひとつの文明が息絶えたのだ。》[1]

反啓蒙主義と機械文明社会のあいだに置かれた必然的な通過点としてこそ戦争は、ル・コルビュジエの主張の現実性を喚起するために、また、崩壊のおそれのある社会的秩序のなかに現代の建築綱領を打ち立てるために、存在するのだ。《戦争は国に驚嘆すべき施設を遺産として遺す。住居を構成する要素の重要な一部品は、製造所や工場のなかで組み立てることができる。乾式工法住居、《プレファブ》住居は、**もっとも広範でもっとも豊かでもっとも急を要する産業の綱領を**、復員時に構成する住居である。きわめて大規模な計画とはすなわち、「都市と農村の住居に必要な設備を整えること」である。農業と工業を実り多く自然を失わぬまま相互依存させることで、大地を目覚めさせるのだ。農村を整備することによって、病んだ都市を酿化するのだ。「連帯と団結をもって」。》[2]

R. B.
〈臼井〉

1 Le Corbusier, *Sur les quatre routes*, 1941, p. 8.
2 *Ibid.*, p. 230.
3 *Ibid.*, pp. 19-20.

▶ Giraudoux (Jean), Murondion (constructions), «Les Trois Établissements humains», Vichy, Ville.
ジロドゥー（ジャン）、ミュロンダン式建造、《三つの人間機構》、ヴィシー、都市

Syndicalisme
労働組合
▶ Alger, Politique.
アルジェ、政治

Synthèse des arts
諸芸術の統合

二重の逆説

アーノルド・リフキン

《ル・コルビュジエは、1923年から1950年の間には *Cahier d'Art*, Zervos［雑誌『芸術手帖』ゼルヴォス社］に一度も出てこない。*Histoire de la Peinture*, Skyra, 1950［スキラ社版、『絵画史』］では、ジャンヌレと言う名は、発想家、論争家としてのみ特記され、画家としては零に等しいとされている。

1950年以降になると、友人たちの職業画家からはル・コルビュジエは排斥されたが、自らは、『建築をめざして』、『総合―大文字の諸芸術』、『形体の創造』、建築と都市計画に関する新時代の通例などの著作のあることを顕示するようになる。各人にはそれぞれ適した場所がある。》[1]

「諸芸術の総合」については、それを言い出して以来、ル・コルビュジエが言葉を変えることはなかった。この観念は1930年代からすでにル・コルビュジエの文章のなかに現れるが、ポルト・マイヨ［パリ市周囲に設けられた街道口の一つで、凱旋門から西方にのびるパリの歴史都市軸上に位置する。］に計画された博覧会場計画案（1950年）以後はじめて「諸芸術の統合」という用語を採用して、自らの仕事の全貌を表現しようとしたのである。これと同じ年代に、ル・コルビュジエは自らの造形的成果（タペストリー、七宝工芸、とくに彫刻）の支持者を増やして、これらの活動が連続して一層ますます建築の仕事と連携するのを明らかにする。その一方で、「建築物の領域の実態は、三つの一体的に連携する大芸術（建築、絵画、彫刻）の表現である」という[2]。成熟期のル・コルビュジエが成し遂げた仕事の前に立ってみれば、ル・コルビュジエの建築に隠された何らかの意味を発見するのに、画家ル・コルビュジエの「秘められた労苦」[3]まで索する必要は何もない。

しかしながら芸術史に関する続巻では、ル・コルビュジエは「総合」という項目を掲げれば自分も取り上げられるものと当て込んでいたが、この巻はまだ執筆されていない。というのも、今日、ル・コルビュジエが言う総合の観念に思いを巡らそうとすれば、必ずやいろいろの障害に行き当たる。「諸芸術の総合」は、まず限界事例としてのル・コルビュジエを提示する。すなわち建築家としての事例である。その野心はル・コルビュジエの活動範囲を都市計画から造形的諸芸術にまで拡張するものであって、ル・コルビュジエが専門とする分野の限界を消し去るという大きな危険が潜んでいる。それは以下のパラドックスに直面させることになる。すなわち建築家が自らの仕事の特殊性を示そうと望むのに（「建築をめざして」）、諸芸術の総合という一切を組み入れる統一性という観念を利用しているからである。

ル・コルビュジエはこのパラドックスが効果を及ぼす射程範囲を測ろうとして、言い方を逆転させる。つまりル・コルビュジエの仕事はつねにそうした統合の特殊な根拠を示すのである。かっては建築全体に対して総合と言うことを言明されたような諸作品を統合する統一性が問題となるのではない。むしろ一作品の存立理由の統一性 omuni ratio opus が問題なのだ。

こう考えてくると、第二の障害が立ちはだかってくる。

緑色の足、厚紙の上に描かれたガッシュ画、1947-1960（個人蔵、チューリッヒ）

つまり、ル・コルビュジエの仕事が、都市計画から造形的な諸芸術まで拡大して諸芸術の統合を顕示するものとして出現するならば、それは何よりもまずその作家の強い人格に起因する。そうすると、かくのごとき統合に普遍的な射程を付与しようとすれば、今日では激情も冷めたと願いたいあの議論を主観のなかに滑り込ませてしまう危険がある。さらに重大なことは、必然的に客観性を保つべき研究分野の知の本性を歪めかねないのである。こうした危険を回避するために、「激情からさめた客観的な」立場に立とうと試みれば―そうすれば、ル・コルビュジエが分断する問題をその「文化的」文脈のなかに据え直して磨きをかけることに導かれる―、しまいにはその話題から意味を抜き取って空虚化してしまうことになる。そこで第二のパラドックスに直面することになり、それを次のように言明することができる。すなわち、ル・コルビュジエの話題が目的とするところ、ル・コルビュジエ自身が明快に読み解いてくれるはずの、ル・コルビュジエ自身による「統合」のみならず、諸芸術を取り上げて行われる一つの「諸芸術の統合」ということの、あの話題の字義上の根源性から出発するほかはない。そしてル・コルビュジエ的思考という個人の思考があらゆる知識に固有な普遍性の前に開くのは、生硬さも含めて文字通りのことなのである。

ル・コルビュジエが直面してゆくあの「諸芸術の統合」と言う問題は、単一の解答を提供するどころか、このように次から次へと一連のパラドックスのなかに、しかもこれに対してはル・コルビュジエが独特の嗜好を養っているあのパラドックスのなかに、われわれを引き入れる。1946年に「諸芸術の統合」の到来を予告するル・コルビュジエは、そのとき諸芸術それぞれに固有な特徴を喚起するのを忘れない。「都市計画は配置する。建築は成形する。絵画や彫刻はそのそれぞれが存在理由とする選ばれた言葉を差し出す。[4]」芸術のジャンルが混じり合う「統合」についてはル・コルビュジエが説教するときは、あたかも最後は「それぞれは固有の場所を有する」で、いつも終わらなければならなかったのである。

1935年、諸芸術の同盟：造形家ル・コルビュジエ

ル・コルビュジエは、実のところ *Cahiers d'art*, Zervos［雑誌『芸術手帖』（ゼルヴォス社）］には1929年と1959年の間に一度たりとも現れてこない。同様に1950年にスキラ社から出版された『絵画史』にも記載されていない。それ以後今日まで、1920年代以降のル・コルビュジエの造形作品は、

彫刻 No33、イコン1、彩色木彫、1963

S

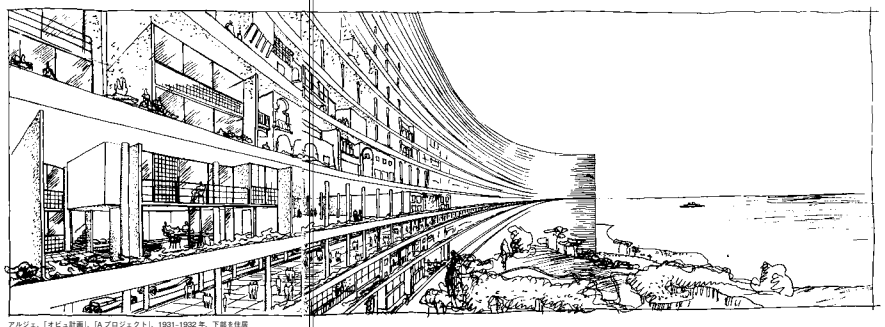
Synthèse

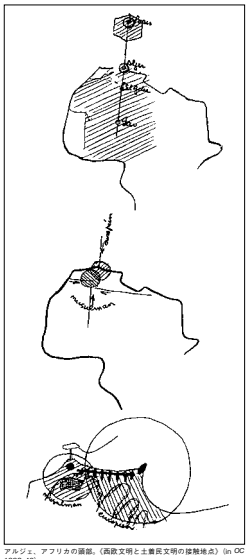
V

Ville

アルジェ：二つの構造の対決

ここで行う説明は、やはりアルジェのための諸計画の検討なしにはできない。それは周知のようにラテン・アメリカの諸都市のために練り上げられた発想と緊密につながっているのである。「オビュ計画」をもって、ル・コルビュジエは各専門の桎梏をすべて取り払おうとしたかに見える。絵画における形象の世界は、都市機械を構造化することに絵画固有の領域を超えて直接的に乗り出し、そこではユニークな建築的オブジェへと溶解している。建築はオブジェの限界を凋零されて、《爆発する》し、恣意的な境界のなかに建築を抑圧していた拘束から身を解き放ちることができるようになる。隠喩はすべて寓意によって語ることをそれまで余儀なくされていたが、いまはその周りに空間を授与することができ、自然の全体性を再形成して服従させるために自然に自らを順応させることができる。「ペイステギ屋階廊」において叶えられなかった《欲望》が、アルジェで頭をもたげ、海に面して蛇行し、自然と歴史を連縮として流れる建築の流線に巻り込まれ、それが描く輪の中に囲い込むことができる。そしてそれは、皇帝妾塞の丘上に勝利


アルジェ、「オビュ計画」、［A プロジェクト］、1931-1932年、下部を住居化した高架鉄橋（FLC 14345）。


アルジェ、アフリカの諸都、《西欧文明と土着民文明の接触地点》（in *OC* 1938-46）

の宿となって陽気に舞踏するのである。

この《差異》に対する勝利が、有機的形態を高揚しつつ、偶然と変化を予見しない機械の完全性に繋ぎえたある構造組織化によってもたらされたのは注目すべきである。素晴らしく現実に根を下ろした技術もしくはそのイメージが、現実をよりよく支配するために現実をその上に折り曲げて服従させているのである。屈曲する建築ブロックの屋根上に設けた自動車の走行道路が表現する迅速性は、その下に納めた住居の各部屋の相互交換可能性や移動可能性にも同じく見られる、加速化され同時的であるような解読を強いる。利用者たちの《悪趣味》を吸収することに成功さえしている、この完全な生産力の断片が正当化する《祭典》に参加すべく、一般大衆は招かれる。この祭典が可能となるのは、各個別的（場所）からの離脱、（剥奪）、この生物的形態の巨大機械を支配する規則への従順によるのである[22]。この巨大機械は伸長し、収縮し、自らの形態によってその機能を顕わにしかつ神話的価値を負荷される。新しく建立されたアクロポリスが、技術と自然の調争を眺めている。アクロポリスから送られる表徴はこの光景に鼓舞しているように見える。

ここでル・コルビュジエは、ハイデッガーが後になって始めて注意すること―すなわち技術の本質はポイエチカ［作ること詩学を併せたラテン的表現か］であり、生産とポイエシス［ギリシア語で、広い意味で作ることを意味する］は共通の語源をもつこと―をすでに認めているように思われる［M. ハイデッガー『技術論』、『芸術作品のはじまり』を参照］。生産が未来を制御しようと企ててその力を存分に繰り広げるとき、神話が蘇ってくるのである。

何故にル・コルビュジエは、神話と技術との和解を発展途上の国々の都市に留保するのであろうか。何故にル・コルビュジエは、あの危機の時代にあり得ない計画依頼を扇動しようと試みてアルジェに固執したのであろうか。

ル・コルビュジエはこうした疑問に対して《公式的》見解を出した。それは地中海世界において彼がアルジェに付与しようとする世界的役割である。グループ・プレリュード[23]の政治プログラムによると《ラテン生産者同志協定》の枢軸点として、パリ、ローマ、バルセロナ、アルジェの諸都市が選ばれ、ル・コルビュジエはアルジェが（アフリカの先頭）となるのを見て取っていた。アルジェはまた、若きジャンヌレが「東方への旅」において探索した文明と同様な、《もう一つの別種》の文明を今もなお表現している土地である。イスラム教文化において、《素朴な人々》の習慣のなかで、ル・コルビュジエは《善良な野生人》の痕跡を探し求めるのではなく、原初的な実在、宇宙的態度、存在するものの大海原との親縁性の痕跡を求めるのである。失われてしまった取り返しのつかない秩序、これをこの計画がよりよい状態で再発見しうる。この合理以前の生活の流儀はエロスに満ちて豊かである。スタニスラウス・ヴォン・モースは、ドラクロワの作品「アルジェの女」を主題とするル・コルビュジエの素描がこの作に関する前兆的価値をもつ強調しているが、それは正当を射ている[24]。

カスバとは、植民者に対しては記憶の貧え者だとして知らせるにふさわしい、この種の生存モデルを内包する宝石箱なのだ。それは、ル・コルビュジエの目にとって、彼がエマのシャルトル―会修道院やアトス山の修道院に認める価値とほとんど同等の価値を持つ。カスバは丁寧に保全されて、ほかならぬ『オビュ計画』が示す完全に生成する機械のイメージのなかに取り込まれている。この生成に対してカスバは必然的かつ記憶に喚起された反対命題である。したがってカスバが1931年のプロジェクトでは新都市によって跨がれているのも偶然ではない。跨橋の形姿はプロジェクトのなかで、隠喩の厚み全体にわたって現れているのである。実際には、この跨橋は、一方に丘陵上の住居地区、もう一方に海に面する業務センターというように、二つの端部を繋いでいる。そしてカスバは無傷でまた手を加えるべきでないものとして遊離され、削除不能で時間的変化の埒外に逃説的におかれたモデルとなる。この構造物の上空を《近代》が《駆けめぐり》、この構造物が語る言語は、すべてが加速装置や歯車装置などの《機械》の言語に還元することはできないのである。しかしながら、この須臾的なものと加速的なるものの隠喩は、カスバへと関連づけら

アルジェ、「オビュ計画 A」、1931-1932年、カスバの上空を跨ぐ跨橋が見える。（FLC 14351）

V

Ville

1948年、セーヴル街35番地のアトリエにおけるル・コルビュジエ

信していたのであった。ところが、突然ル・コルビュジエがアトリエに入ってきて、若い女性との会話を遮り、所員であったキャンディリスに外に仕事に行くようにとの命令を言い渡したのであった。これと同じ話として、ジェラルド・ハニングの娘婿のヴァダンという臨時雇いの青年が、どうしようもないほど厄介な状況に追い込まれて、当惑したのであった。

調和と変調

これらの一時的な破廉恥行為はしかし、リュ・ド・セーヴル35番地で行なわれたきつい仕事を隠蔽するはずもなかった。事務所は活動しているあいだずっと、ル・コルビュジエの二つの要素からなる生活のリズムに従って動いていた。すなわち、ル・コルビュジエは一日の半分は絵を描くこと、文章を書くこと、研究することに使い、残りの半分は、建築計画案のために使った。1952年から1953年の頃まで、ル・コルビュジエはアトリエには午後しかいかなかった。しかし、この頃からは、午前中を建築のために使おうとするようになった。『かばんの旅』という題のついた未刊の著作のなかで、ル・コルビュジエは1954年にこうした分割生活について自分の考えを述べている。すなわち(さまざまな繋がり（しがらみ）を絶つため、人を近づけないため、**無私で**創造的で力強くて活気に満ち、過去と未来が対になったほかのことを考えるため、毎日一日の半分、午前か午後を自由に過ごしたい)[6]。ル・コルビュジエの不規則なアトリエへの出勤は、所員たちの役割、とりわけ、戦前にはピエール・ジャンヌレが務めた主任の役割を増大させた。ジャンヌレは、無給の実習員の仕事を指導したり、計画案の進捗状況に心を配ったり、施工図の細部を決めたり、企業と打ち合わせをしたり、従兄弟と現場を訪れたりすることに、一日中かかりづめだった。戦後この役目は一部アンドレ・ヴォジャンスキーが受けもった。しかしヴォジャンスキーは、企画とか郵便物とか日常の運営とかさまざまな交渉などといったもっと管理業務的な視点に立った仕事をした[7]。

一日がこのように二極化している状態に、ル・コルビュジエの不在（外国旅行あるいは講演のため）がさらに加わった。彼の不在はしばしば、仕事の遂行の妨げとなった。しかし、混乱は、ピエール・ジャンヌレとル・コルビュジエの二人の従兄弟が一緒に休暇を取ると決めたとき、絶頂に達した。若い実習員たちは、ただ施主や交渉相手を卒倒させることのほかに、どうやって時間を使ってよいか分からない状態であった。これらの苦難を証言してくれるシャルロット・ペリアンは、苦々しい経験の思い出を語っている。ル・コルビュジエが留守のあいだにペリアンは、プールジェの空港のためにかさな建物を検討していた。戻るや否やル・コルビュジエは、ここを少しあそこを少しという具合に変更しようと試み始めた。その結果、二時間後には、元の計画案は跡形も残っていなかったのである。(今度ばかりは)、とペリアンが報告している。《ル・コルビュジエはひどく私に悪口を言ったため、私は、このアトリエを出て、違う仕事につこうとまで決めたのです。翌々日私は、辞職するつもりでル・コルビュジエに会いにアトリエに戻りました。すると彼は私の顔を見るなり、こう言ったのです。「さあ、急ぐんだ！早くここに座って！」と。心の中で私は安堵しました。彼は私に仕事に戻るよう勧めたのです。結局のところ、私はそれほど運が悪くなかったようです)。こうした、ル・コルビュジエの不在のもっとも悲劇的な例は、マルセイユのユニテ・ダビタシヨンの場合に起こった。この時期のル・コルビュジエは、稀にしかアトリエに顔を出さず、ほとんどずっと国際連合の計画案のためにニューヨークにいた。ところが、緊急に決を下さねばならない事態が、特に窓の配置に関して生じたのである。ル・コルビュジエの帰りを待ちくたびれたウラジーミル・ボディアンスキーは、自分で事を処理してしまった。このことがル・コルビュジエにとっては自分の不面目となり、しかも何と、アトリエとATBATのあいだの分裂をも招いてしまったのである[8]。

旅行から戻ったル・コルビュジエは、自分の留守中に描かれた図面のすべてを確認しようとした。戦後この設計事務所の主任を務めたアンドレ・ヴォジャンスキーは、腰を低くしながら、出来あがった資料のひとつひとつを呈示した。というのも、顧主・ル・コルビュジエの怒りの発作をよく知っていたからである。60年代のあいだ、ひとつの紛れもない礼式が巨匠ル・コルビュジエの帰国に合わせて執り行なわれた。巨匠は、インドに滞在中に企画された作品全体が、窓と反対側の大きな壁の上に貼られるのを好んだ。そこで彼は、あたかも自ら率いる一団を吟味するかのように、図面のひとつひとつにじっと目を注いだのであった。

まさしく時計師の許で生まれたル・コルビュジエは、異常なまでに時間に厳しかった。――彼の助手たち、とりわけ無給の実習員たちとは対照的であった。彼は、事務所に一番早く着いたことをしばしば喚いた。《正確さは必要なものです》と彼は自分の考えを述べた。《時間の観念や正確さについての感覚がないのに、どうやって人に命令を下せますか。どうやって人の上に立てるのですか。笑い興じるためであっても、時間に几帳面でなければならないのです！》[9]。どれほど異常なまでに細心綿密であっても、時間の使い方次第で余裕ができれば、ときとして彼は、自ら進んで自由をいくばくか謳歌した。その代わり彼は、所員たちには典型的にスイス的な正確さを要求し、朝の遅刻に対して休みなく罵りのことばを浴びせた。勤務記録にはこの点について、多くのことが記載されている。手段を尽くしてル・コルビュジエは、自分の話を聞かせようとした。《私の一日が諸君とともに働くことで始められるよう、諸君が朝の9時に出勤してくれることを望みたい…。私が求めていることはまったく自然なことのです。もっとも、郊外に住んでいる人は少々大目に見たいと思いますが)[10]。さらに、ル・コルビュジエは、仕事の時間は一日8時間であると激怒しながら明確に言い放っていた。別のおり、決意を表わすときに彼は、皮肉混じりにこう言った。《すべては順調です！諸君は皆ベッドから出るのが少し辛いようですね（めいめい目覚まし時計を買いたまえ）。そうか、諸君は芸術家だったんだ！》[11]

こうした時間のロスを埋め合わせるためか、あるいは単に所員たちからいくらかでも時間を搾き集めるのが楽しみだったのか、とにかくル・コルビュジエが自分の時間表の午前と午後をひっくり返し、朝事務所にいるようになったときの次のような話は事実である。すなわち、ル・コルビュジエは朝から午後の1時をすぎた頃までずっと事務所にいることが頻繁になり、誰であれ所員の製図板の前に陣取ってこの所員が来るのを待っていた。しかし、この策略に気づかれるとル・コルビュジエはいったん自宅に帰り、きっかり正確に午後の2時に、取るに足らない用事を口実にして事務所に電話をかけ、自分が待っていた当の女性所員と話がしたいと言うのであった。もちろん、この女性所員がちゃんと仕事に戻っているかどうか確かめるためにである。

計画案とその推移

直ちに自らの実績と行動を公にするのが常であったル・コルビュジエという冗長な作家にとって、自らの創造行為の過程を説明することがなかったという事実は、驚くべきことのように思われる。稀な例外を除けば、ル・コルビュジエは、自らの作業の方法を解説することは差し控えていた。したがって、ル・コルビュジエの近くにいた人々の証言に頼らざるをえなくなる。しかし、ル・コルビュジエ自身については、次のような意志表示を取りあげておこう。《ある仕事が私に任されたとき、私は習慣として仕事を私の記憶のなかにしまい込むことにしている。つまり、数ヵ月のあいだ、いかなるスケッチも描かないことにしている(…)。そのときには、《漂い》、《ゆっくり練りあがり》、《発酵する》に任せている。次にある日、留め金がはずれ、内面にあるものが自発的に動きだしてくる。そのとき鉛筆や木炭、色鉛筆（色彩は少みの鍵である）を手に持ち、紙の上にデッサンを描くことになる。つまり考えが出てくるのだ》[12]。しかし、この操作が行なわれているときに、ほかの誰も居合わせることはなかった。ル・コルビュジエはたったひとりであり、テーブルクロスの上に描かれた小さな下絵、メトロの切符、紙切れもしくは手帖を携えて、製図台の前に行き、こう言うのであった。《これがなすべきことなのだ》と。たまにル・コルビュジエは、練習用のトレーシングペーパーの上にかなり大きな尺度で図面を描いた。次にこの図面を判読し、理解し、解釈するのが、ドラフトマンたちであった。これらのスケッチを解釈するには充分な実習期間が必要であった。ときおり、解読のために何人もの手を動員し、年長の者が辿るべき道筋を見つけるまでこの作業は続いた。今日では、ジョルジュ・キャンディリスは、一目見たときには難解で速記のように見えるこれらの図面を比較することができるもの、ギルルモ・ジュリアンはこれらの図面を再読することは今でもむずかしいと、対照的な告白をしている。

解読されたあとでは、これらの図面の方向づけが正確かつ豊かなものであることが明らかになるのである。このことをアンドレ・ヴォジャンスキーはぶっきらぼうに打ち明けることができた。《そこには、新たにつくりだすものは何もなかったのです。ただ仕上げればよかったのです。ル・コルビュジエは、このアトリから発するすべてのものを立案するただひとりの人間でした》。シャルロット・ペリアンが褒めそやした、リュ・ド・セーヴル35番地の自由

目　次

序文　ジャン・マウー

調和の人　フランソワ・ブュルカルト

執筆者一覧

「ル・コルビュジエ　不屈の冒険」展について

ル・コルビュジエ年代記

事　典（ABC順に145項目）

参考文献

人名索引

事項索引（コンセプト、計画案、実施作品）

図版の版権リスト

監訳者あとがき

〈訳者紹介〉

〈監訳者〉

加藤邦男（かとう・くにお）

京都大学名誉教授・工学博士。『フランスの都市計画』（単著）鹿島出版会（1965）、『ヴァレリーの建築論』（単著）鹿島出版会（1979）、『現代建築の根』（単訳；ノルベルグ＝シュルツ著）A. D. A. Edita Tokyo（1988）、『建築的場所論の研究』（共著）中央公論美術出版（1998）、『バロック建築』（2001）（単訳；ノルベルグ＝シュルツ著）『図説世界建築』第11巻、本の友社、ほか

〈訳者〉

黒岩俊介（くろいわ・しゅんすけ）

広島工業大学環境学部教授・工学博士。『ゴシック建築』（共訳；ルイ・グロデッキ著）本の友社（1997）、『プロテスタントの宗教建築』（単訳；ベルナール・レモン著）教文館（2003）、『聖堂の現象学―プルーストの『失われた時を求めて』にみる―』中央公論美術出版（2006）、ほか

白井秀和（しらい・ひでかず）

福井大学大学院工学研究科教授・工学博士。『カトルメール・ド・カンシーの建築論』ナカニシヤ出版（1992）、『ルドゥーからル・コルビュジエまで』中央公論美術出版（1992）、『ルドゥー「建築論」註解』中央公論美術出版（1993-94）、『ル・コルビュジエの手』（単訳；アンドレ・ヴォジャンスキー著）中央公論美術出版（2006）、ほか

松政貞治（まつまさ・ていじ）

富山大学芸術文化学部教授・博士（工学）。『ル・コルビュジエの手帖―東方への旅』（共訳、ル・コルビュジエ著）同朋舎出版（1989）、『ル・コルビュジエ建築設計資料集成』（全32巻目録翻訳）同朋舎出版（1991）、『パリ都市建築の意味 - 歴史性：建築の記号論・テクスト論から現象学的都市建築論へ』中央公論美術出版(2005)、ほか

石坂弦二郎（元奈良芸術短期大学講師）、伊從勉（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、呉谷充利（相愛女子短期大学生活学科教授）、迫田正美（滋賀県立大学環境科学部講師）、島岡成治・（日本文理大学工学部教授）、千代章一郎（広島大学大学院工学研究科助教授）、田﨑祐生（大阪成蹊大学芸術学部助教授）、松本裕（大阪産業大学工学部講師）

つくること＝生きることの激烈な軌跡

安藤忠雄（建築家）

独学で建築の道を歩みだした20代半ばのとき、建築とは何かを探し、決死の思いで西欧への旅にでた。その主たる目的の一つが、ル・コルビュジエの建築を自分の目で確かめることだった。
長い旅路の末にようやくパリにたどり着き、昂る気持ちを抑えながら、急ぎポワッシーの丘に向かった。1965年当時のサヴォワ邸は、写真で見ていた真っ白な箱のイメージとは程遠い荒んだ状態にあったが、剥げ落ちた外観の向こうに、自然に逆らって建築を立ち上げる建築家の意思を強く感じた。廃墟であることが、逆に建築の力を浮き彫りにしているようにすら見えた。以来今日に至る40年間の建築活動の中で、私が追い求めてきたのは、この時心に焼きついた建築の力であったような気がする。
ル・コルビュジエは、建築だけでなく、その生き方においても、すぐれた指針となった。自身の建築の理想、その実現のために常に社会と闘っていく姿勢だ。闘いは勝つとは限らない。実際、1920年代から都市への提案を始めていたル・コルビュジエも、そのアイディアを具現化できたのは十数年の空白の時を経た戦後のことだ。そうしてしぶとく闘い続けた後、ル・コルビュジエの建築は最後、ロンシャンの礼拝堂、ラ・トゥーレット修道院に至り、自身の半生をも否定するような大きな変貌を遂げる。つくること＝生きること。余りにも激しく、業深い建築家の生涯であった。
本書にはこの偉大なる巨匠の歩いてきた足跡が、建築だけでなくその人間も含めて克明に記されている。最初の旅でパリを訪れた時、一目会えればとアトリエを探して街をさまよった。実はその1ヵ月前にル・コルビュジエは亡くなっており、たどり着けたとしても果たせぬ願いだったのだが、その対面が今、本書を通してかなえられようとしている。

多様な情報を満載した近来の快挙

高階秀爾（美術史家）

現代建築に多少とも関心を持つ人にとって、ル・コルビュジエの名前は改めて紹介するまでもないほどよく知られたものであろう。その活動は、建築はもとより、絵画、装飾芸術、都市計画など広い領域にわたり、国際的にも大きな影響を及ぼした巨人である。今回、パリのポンピドゥー・センターの編集により、世界各国の優れた研究者の協力を得た浩瀚な『ル・コルビュジエ事典』の邦訳版が刊行されるという。事典と言っても、単に項目の解説を並べただけではなく、ひとつひとつの項目が時に学術論文に匹敵するほど水準の高い詳細なものであり、しかも同時代の芸術運動や国際的な動向にまで、広く眼配りがきいている。ル・コルビュジエその人の生涯や業績について充分な頁がさかれていることももちろんである。さらに、カラー、モノクロあわせて600点に及ぶ写真・図版が収められているのも有難い。
日本では、東アジアにおける彼の唯一の作品である国立西洋美術館があり、また、坂倉準三、前川國男、吉阪隆正など直接その教えを受けた建築家が活躍したことにより、この巨匠に対しては特に親しみが深い。個人の評伝と、歴史と、学術論文集と資料集といういくつもの性格を兼ね備えた本書の刊行は、まさしく近来の快挙と言ってよいであろう。

ル・コルビュジエ学の底知れぬテキスト

富永　譲（建築家）

待望の書物の出版である。生誕100年を記念する展覧会と同時に刊行されたこの事典は、事典とはいうものの、項目それぞれが、信頼すべき一級の執筆者による鋭い論考が次から次へと並立するといった風の、研究の蓄積を一冊に集成した本であった。体裁もフランスのエスプリを感じる実に洒落たセンスで図や写真が取り扱われていて、時々書架から取り出しては眺めていた。馴れぬ仏語を辿って読もうとすると、高度で、情報量は並はずれていて、項目ごとの注釈も周到で、驚かされる。ただ頁を繰ると、ル・コルビュジエという一人の人間の底知れぬ深さと、仕事を巡って、その回転する多面体の輝きが万華鏡のようにきらきらと現れてきて豊かな気分になった。
以前から加藤邦男氏をはじめとする京大グループが邦訳されているという話をうかがい、じっくり読むのはその機会にと考えていた。高度な内容であり、正確で達意な文章に移す作業に長い時間をかけ、万全を盡されたにちがいない。今、試刷りを見ると、美しいレイアウトも踏襲されているようだ。人間臭い生身のエピソードも満載されている。興味はつきない。
ル・コルビュジエ学とでもいうべきものの全体が、さまざまな視角から一冊に集結し、本書が明晰な日本語で読めることになったのは実に有り難い。あの、全8巻の作品集とは別に、その作者に対する注釈である『ル・コルビュジエ事典』は、今後、多くの建築家の興味を惹きつけ、座右の書となり、再び20世紀を生きた人間の知をめぐる「底知れぬテキスト」になるだろう。

ポンピドゥー・センターの企画のもとに、フランス国内外の最高の執筆者による高度の内容の論考を募り、ル・コルビュジエの生誕百年を記念すべき一大文化・学術事業として、フランスの文化省の支援を受けて、センターが威信をかけて刊行。20 世紀最大の建築家ル・コルビュジエの著作や作品、その批評やそれらが全世界へ及ぼした影響などに関係する 145 の主要な項目について、各国の代表的研究者 61 名による詳細で学術的な論考をアルファベット順に配列。ル・コルビュジエ関連の書物としてはもちろん、芸術・文化事業としても類を見ない決定版事典の完全日本語版。

書　名 **ル・コルビュジエ事典**

2007 年 3 月刊

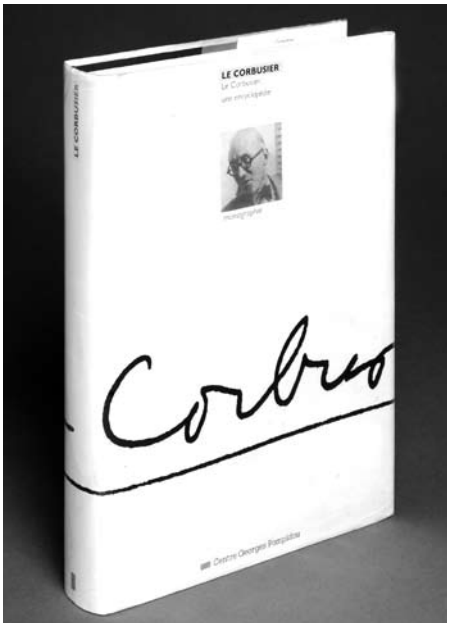
監　修：ジャック・リュカン（スイス連邦工科大学ローザンヌ校教授、同建築論・建築史研究所所長、建築理論専攻）

監　訳：加藤　邦男

判　型：A4 判
頁　数：本文 640 頁
図　版：カラー図版・写真 54 点
　　モノクロ図版・写真 547 点
体　裁：上製本カバー装・函入り

ISBN978-4-8055-0540-3

定　価：**63,000 円**（本体 60,000 円＋税）



原書（フランス語版）

本書をお薦めする方々

○建築設計、都市計画、造園・ランドスケープ、美術史、デザインの研究者・研究室
○フランス文学・文化史、思想に関心ある読者
○大学図書館・公共図書館
○建設会社・建築設計事務所
○都道府県の都市計画課・建築土木課
○建築雑誌の購読者

本書の特色

■項目はル・コルビュジエの広範で精力的な活動全分野にわたる的確なものが選択
■世界各国 61 人のル・コルビュジエ研究者による論考と、ル・コルビュジエ自身の著作からの引用で 145 の主要な項目を構成。単なる事典にとどまらない深い内容。
■カラー 54 点、モノクロ図版 547 点の図版・写真・図面により資料的価値を一層深めている。
■原書の美しいレイアウトを踏襲した日本語版。
■ル・コルビュジエ年代記を併載。

中央公論美術出版
http://www.chukobi.co.jp
〒 104-0031　東京都中央区京橋 2-8-7
電話 03-3561-5993　FAX 03-3561-5834

お取り扱いは